

# 幸福の赤いサクランボ



## 中国ではなく県内で増産

私が見た中国には、膨大な数の中間所得層が出現していた。日本の中間所得層と肩を並べ、やがては追い越す日が、遠くない将来に必ず来るだろう。

中国に進出して、現地でのサクランボの大規模栽培に携わり、さらにブランド化して、中国国内や海外へ販売していくことは、

とても大きな夢だった。しかし、それには多額の資本を投入しなければならぬ。技術指導や流通の面でも、難しい問題がある。とてもかなわぬことだと思いついた。

一方、山形県で栽培するサクランボの生産を拡大して、世界に発信できるブランドに育てていくこ

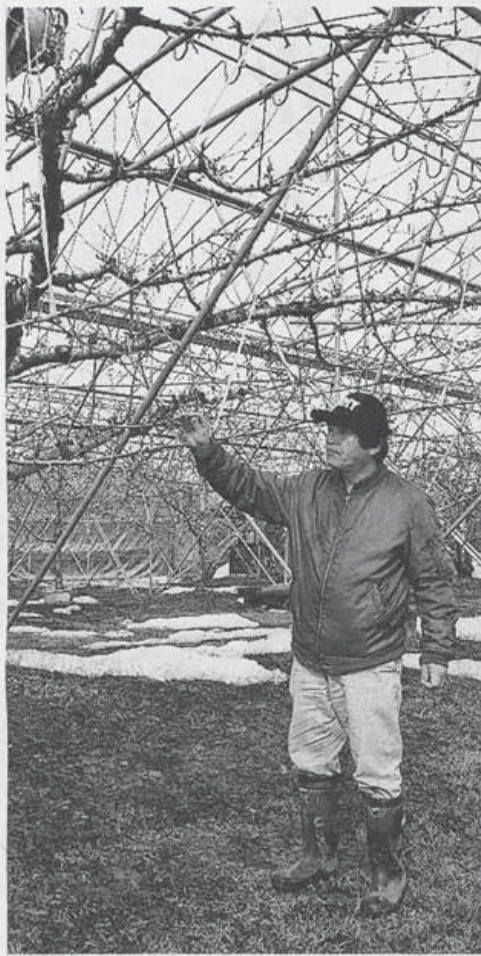
とは、これまでの営農の延長上で出来る方法ではないかと考えた。国内のサクランボの消費量は、まだまだ伸びる余地がある。2011年から始めた「紅姫」の冷蔵保存技術を使うことで、10年先には中国や韓国、ロシア、東南アジアなどの国々へサクランボの輸出を行えるようにしていく。そのため、独自のブランドで販売する路線を継続・拡大していく生産態勢を整えることが必要になる。

その具体策として、主産地である山形盆地より収穫時期が約1週間遅い最上郡金山町で、サクランボを大規模に栽培する計画に取り組み始めた。

3月に入り、農園の周辺も雪解けが進む。サクランボの剪定や新植栽の準備なども始まり、本格的な繁忙期になってきた。

振り返ってみると、昨年9月の中国旅行から半年が経過しようとしている。私はこの半年間、旅行中に新たに知った中国国内の変化や、多くの人々から伺った中国経済の将来見通しなどをもとに考え、将来の多田農園の姿を思い描く作業を続けてきた。

その結果としての決断が、中国でのサクランボ栽培を断念し、山形県での栽培面積を倍増させることだった。



サクランボの木の様子を見る多田さん(左)、山辺町の多田農園